

道 どうひょう 標

d o h y o

年間特集 「不安」

第二回・わたしの中の世界 / 世界の中のわたし 中川五郎 さん

連載

あなたのいのちの物語

アメリカン・スクール

伝承を科学する

形見に込められる思いと迷い

道しるべ

本尊

2024 春季号



年間特集

「不安」

「わたしの中の世界、
世界の中のわたし」

第二回 中川五郎さん

もう二年近くも前に思いつき、その後なかなか完成しなかった歌がある。メロディと一緒に二番までの歌詞はすぐにできたのだが、それだけでは完成したとは到底言えず、結びとなるような歌詞がどうしても必要で、それから一年以上三番の歌詞をあれこれと作り続けた。納得のいかないまま、とりあえずライブでも歌ったりしていたが、去年2023年の秋の初めによくこれだという三番の歌詞ができあがった。歌のタイトルは「世界とわたし」というもので、その歌はこんなふうになる。

♪「わたしの中の世界／わたしがいなくなれば／世界もそこで終わる／世界はわたしの頭の中／わたしがいなくなれば／世界もなくなる」

「世界の中のわたし／わたしがいなくなっても／世界は続いていく／どこかでまた誰かが生まれ／変わる／ことなく／世界はそこにある」

そしてようやくできた三番の歌詞はこうだ。

「わたしの中の世界／世界の中のわたし／わたしのいない世界／でもわたしは世界にいる／わたしがいなくなっても／わたしは世界にいる」

この歌をぼくが思いついたのは、60歳を過ぎてからあることと向き合うことが多くなり、70歳を過ぎてからはそれがますます多くなっていくからだ。あること、それは親しい人たちとの永遠の別れ、友だちや肉親、知人がこの世を去ってしまうことだ。

先にこの世を去る人たちがぼくよりも歳上だとはかぎらない。ぼくと同世代の人たちもいれば、ぼくよりもずっと若い人たちの時もある。

ぼくは永遠の別れの悲しみに襲わ

れ、深い喪失感を抱きながら、その死は誰かの死ではなく、自分の死であつてもおかしくないと考える。自分だつて必ずこの世を去るし、それがいつになるのかなんて絶対にはわかない。そして死に対しての激しい不安に襲われる。死ぬとはどういうことなのか。自分がこの世からいなくなるとはどういうことなのか。もちろんそんなことは子供の頃から何度も何度も繰り返してきつてきた。しかし70代も半ばになると、友だちや仲間との多くの別れを体験する中、そのことが恐ろしいほどの現実味を帯びてくる。死への不安でいっぱいになって、ぼくは「わたし」と「世界」のことを考え、そうしてかたちになっていったのが「世界とわたし」という歌だった。

ぼくが思いを巡らせるのは、自分がいなくなった世界のことだけではない。自分が生まれる前の世界、自分がいなかった世界のこととも考える。自分がいないのだからどうしようもないのだが、それでも何千年、

何万年もの長い間、自分はいなかったのだという事実に向き合うと、それはとんでもなく恐ろしいことだと思えてしまう。そして自分がいなくなった後、また同じように自分のいない長い年月だけがあるのだと考えると、一度生まれってしまったぼくは、それ以上の恐怖に襲われてしまう。

二番の歌詞の「わたしがいなくなっても／世界は続いていく／どこかでまた誰かが生まれ」というのは、1960年代半ば、ぼくが高校生だった時に聞いた「And When I Die」という歌が、55年以上が過ぎてぼくの心に強く残っていたからだと思う。ぼくが最初にこの歌を聞いたのは、アメリカのモダン・



自分がこの世からいなくなるというこは？

フォーク・コーラス・グループ、ピーター・ポール&マリーの歌であったが、歌の作者はローラ・ニーロというニューヨーク出身のシンガー・ソングライターで、1947年生まれの彼女が17歳の時に作詞作曲した歌だった。その歌でローラは、「わたしは死んでも一人の子供が生まれこの世は続いていく」と歌っていた。その歌を聞いた時、まさに17歳だったぼくは、死とは自分が世界からいなくなることだとしか考えられなかったので、同じ17歳でそんな達観した考えをしているのかと、激しい衝撃を受けてしまった。

70代も半ばとなった今でも、ぼくはまったく成長することなく、死とは自分が世界からいなくなることだと考えて、死に対する不安を抱いている。しかし世界はわたしだ、わたしは世界だと決めつけるのではなく、わたしがいなくても世界があるのはもちろんのこと、わたしがいなくてもわたしは世界にいるのではないかと考えるようになってきている。それは歳を重ねるにつれて向き合うことが多くなった大切な人たちとの永遠の別れから、ぼくが教えら

「わたしがあつてこそその世界から 世界があつてこそそのわたし」という発想へ

れたり、学んだりしているからではないだろうか。

まわりの「世界」を見れば、戦争、異常気象、環境破壊、感染症、天災、人災、さまざまなことに対する不安が渦巻いている。しかもぼくらが今生きている日本というこの国では、



なるうが、災害が襲いかかるうが、自分が巻き込まなければいい、自分が被害に遭わなければいい、すなわち自分が死ななければいいという「わたしが世界」という考えを持ち続けている、何の救いもないということだ。

「世界とわたし」という短くて単純な歌を作る中で、ぼくは世界とわたしのことを繰り返し返し考えた。わたしがいないればいい、わたしがいなくなればそのあとの世界のことはもうどうでもいいという、これまでの幼くて利己的な自分の考えや発想を乗り越えて、もう一つ先の地平に、もう一つの段階にどうすれば進めるのだろうかという歌を作

りながらもがいていたのだと思う。わたしがあつてこそその世界から世界があつてこそそのわたしという発想に切り換え、わたしの不安と世界の不安とを重ね合わせる。それこそ宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』の中の有名な言葉をもじって、「世界が

不正、欺瞞、差別、人権無視などが罷り通り、このままではこの国は滅びてしまうのではないかとという不安すらある。そうした不安をすぐに消し去ることができる安易なやり方などどこにもない。あるのは、今ある不安と向き合って、目の前の問題をひとつづつ解決していくという、気が遠くなるほど地道で根気のいるやり方だけだろう。少なくとも、戦争

ぜんたい平安にならないうちは個人の平安はあり得ない」という、そんな境地にまで達しなければ、ぼくは今も抱え続けている死への不安を乗り越え、新しい答えを見つけ出し、救いを得ることができないのではないだろうか。そこで初めて自分の不安は「ちっぽけ」なもので、得られる救いはとても「大きい」と気づくことができるのではないだろうか。

とはいえ、正直なところぼくはそこまで達観できず、まだまだいろんなことを考えながら、今日もライブで「わたしの世界へ世界の中のわたし」と歌っている。

中川五郎（なかがわごろう）

1949年大阪生まれ。60年代半ばからアメリカのフォーク・ソングの影響を受けて、曲を作ったり歌ったりし始め、68年に「受験生のブルース」を発表。その後音楽に関する文章や歌詞の対訳、小説の執筆やチャールズ・ブコウスキーの小説の翻訳も手がける。現在は歌うことが活動の中心で、新曲を作り、日本各地でライブを行なっている。最新アルバムは2017年の『どうぞ裸になって下さい』、著作にポップ・ディランの20世紀の歌詞を全部訳した『ポップ・ディラン全詩集』（2005）や自伝本の『ぼくが歌う場所』（2021）などがある。ライブ・スケジュールは、www.gonakagawa.com 。

「悲しみの分かれ目」

小島信夫

「アメリカン・スクール」

大学を卒業して間もない一九四二年から中国で従軍し、敗戦とともに復員して高校で英語教師をしていた著者が、五四年に発表して芥川賞を受賞した作品だ。

三〇人ほどの英語教員がアメリカン・スクールに見学に行く話だが、主な登場人物は英語教員のうちの三人だ。英語力はあるがしゃべるのが苦手な伊佐、得意になつて英語で話そうとしアグレッシブな山田、そして巧みに英語を話すがひけらかしたりしないミチ子である。

県庁前の広場に英語教員たちが集まり、六キロの道のりをアメリカン・スクールまで歩いていく。ミチ子はハイ・ヒールをはいて帽子まで被つて盛装のつもりだが、「かえつて卑しいあわれなかんじをあたえた。」ミチ子は歩き始めると準備よく運動靴にはきかえるが、伊佐は英語で

話しかけられるようなことがあつても黙つていられるようにと、英会話が巧みなミチ子のそばにいようとす。伊佐はその頃はなかなかはけなかつた皮靴をはいているが、そのために足が痛くなり、ついていけなくなる。その伊佐に好意を抱くミチ子は何とか助けようとする。

ミチ子は道の途中で進駐軍の黒人に話しかけられ、なめらかな英語で応じるので、チーズの罐やチョコレートをもらつたりする。そして伊佐を進駐軍の自動車に乗せてやろうとするが、伊佐はそうすれば英語を話さなくてはならないのでそれを避けようと必死だ。だが、結局



は山田と黒人にジープに乗せられてしまう。ジープが行つてしまうと「あとで爆笑がおこつた」。ミチ子も「忍び笑いをしていたが、伊佐の遠慮深さがのみこめず。あの人は戦争中に米人をよほどひどい目にあわせたのではないかしら、と思つた」。

アメリカン・スクールでは、日本人教員たちは授業参観をしたり、校長の挨拶を聞いたりするが、屈辱的な経験が多い。ウイリアム校長はここは「七人ほどで一クラスだが、日本の学校は今も生徒が七〇人ぐらいで多く団体教育で、これが軍国主義の温床だなどという。韻を踏みつづ日本社会を見下すジョークだ。ミチ子はハイ・ヒールをすべらせて廊下で転び、隠しもつていた男物のお箸が見えてしまつたりする。山田はモデル・テーピングをしたと言つて

「英語に対する熱意」だというが、校長は「特攻精神ですか」とけんもほろろだ。

戦勝国から恩恵を授けにきた米国人に対して、英語発話力をひけらかしたい山田と何とか英語発話から逃げようとする伊佐のふたりは、実はともに反米、あるいは対

米コンプレクスが表に出てしまうが、適応力があるミチ子はそんなさぶりは見せず米国人に好かれるが、伊佐に好意を寄せ何とか守ろうとしている。

この短い半日ほどの出来事の逸話的物語は、弱い立場にあるいのちの悲しみを描く、ゴーゴリなどブラックユーモアの文学の系譜を意識したもので、敗戦後の占領下にある国のいのちの悲しみを巧みに切り取つて描き出している。だが、高度経済成長をとげた七〇年後の今も、その様態は受け継がれているように感じ、笑いとともにはふだんはあまり意識したくないが実は根深く潜在する怒りや涙を思い起こさせてくれる。

島園進（しまどのすすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在上智大学大学院グリーンフケア研究所客員所長。著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちをつくつてもいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科

学

する

形見に込められる思いと迷い

身近だった人が行方不明となり、生死も不明。こういうことが日常的に起こりえた時代、別れと再会、演劇において大きなテーマとなっていた。能楽でも、それがテーマになる作品が多くある。

物狂いの女が主役の能「柏崎」。主役の女は、自分の夫が旅先で亡くなったという知らせをうける。また同時に、我が子が無常を感じて出家して居なくなったことを知る。女は「亡からん父が名残には、子ほどの形見あるべきか」と思いを募らせ、我が子を探す旅に出る。たどり着いたのは善光寺。女は、僧侶や参集する人々の前で、夫の形見である直垂と烏帽子を自ら身につけて舞を舞う。そして女は、善光寺で修行中の我が子に再会するのである。ハッピーエンドである。

物語の中で重要な役割を果たすのが、身につける「形見」である。同じ物狂い能の「班女」。主役の遊女は、恋人が再会を約束して残っていた形見の扇を、肌身離さずにもって引きこもっている。女は恋慕

の思いが捨てられず、思いを風景に寄せて歌いあげる。夏が過ぎて秋になる。欄干に立ちつくし、空を高く眺めると、夕暮の秋風が吹いてくる。風は松に吹きかかつて音を立てているのに、自分には恋人の音づれ（訪れ）はない、と。そして「せめてもの形見の扇手にふれて」と言いつつ、形見の扇をもって舞い戯れるのである。最後には再会のハッピーエンドがくる。

これらの作品では、形見にこめられた思いの先にくるのは、死別ではない。形見とはそもそも「形」を「見る」ためのもの。つまり、今ここに存在しない人の姿に出会う可能性、夢と希望を与えてくれるはずのものである。

しかし、形見がハッピーエンドを導かないことも多い。能の「清経」を紹介しよう。京に残る平清経の妻のもとに、戦地からの使者が訪ねてくる。使者は妻に向かって、清経が船から身投げをして亡くなったことを知らせる。そして、肌につけていたお守り、船に残されていた清

経の遺髪を、形見として渡す。妻はその形見を手にしても、まだ夫の死を納得できない。通夜となり眠りに入ると、その夢の中に清経が現れるのである。清経は、瀬戸内海を西へと敗走していく平家の様子、その絶望感を語り、自らが入水する様子を物語る。そうして清経は、念仏を唱えながら「これまでなりや」と、妻に別れを告げて消える。形見を目にしたときから、再会の夢は断たれている。むろん形見には、死者を蘇らせてくれる験力など備わっていない。「思う人の不在」とい



形見の烏帽子を身につける女
国立国会図書館ウェブサイト
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1881031/1/30>

う事実を、強く実感させるだけである。しかし、不在の感覚の強さは逆に、その人に死者の生前の姿、つまり幽霊を幻視させる力を与えるのだろうか。

「松風」という能の作品がある。主役の松風の幽霊は、かつての恋人だった亡き在原行平の形見の衣を抱きしめつつ「形見こそ今は徒なれこれなくは、忘る、時もあらましものを」という古今集の和歌を歌い込む。「この形見ええ無ければ、忘れることもできたはずなのに」と歌う。行平を忘れることができないのである。

形見に強い思いを寄せることは、仏教的には「迷い」のひとつだと言えよう。しかし、いや、だからこそ、形見に迷う人物を描く能の作品は、我々の心に深い共感を与えてくれる。

藤田隆則（ふじた・たかのり）

一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。

天岸淨圓 (あまぎしじょうえん)

1949年(昭和24年)生まれ。本願寺派布教使。
行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。

◆ 本尊

本尊という言葉は仏教徒には大変親しい言葉といえる。しかしながら、親鸞聖人の言葉づかいの中に「本尊」の語を見ることはできない。聖人の場合は使われる語は当然であるが、使われないにも深い意味があると考へなければならぬ。誰もが当然のように用いるのに聖人は用いない。

そこで、本尊の語義を確認すると、「本」は根本の意で、「尊」は至尊の意味で用いる語である。根本の「本」とは「根」の意味で、枝末の「末」に対する語である。根は植物の命に関わる重要なたらしきをなしている。枝葉を刈っても来年には芽が吹く。それに対して根を損ずれば枯れてしまう。至尊の「至」は至極を意味し、「尊」は尊重・尊敬をあらわし、究極として尊重すべき価値を表す用語である。

そこで「本尊」の使い方を見てみよう。お寺のご本尊。ただ、お寺は浄土真宗だけでなく、さまざまな宗旨の寺がある。中には一ヶ寺の中に多くのお堂が建てられている場合もある。阿弥陀堂、地藏堂、不動堂、毘沙門堂、大師堂など、それぞれに名が付けられている。それらのお堂には、それぞれ異なるご本尊が安置されている。阿弥陀堂では阿弥陀さまがご本尊、地藏菩薩、不動明王、毘沙

門天、お大師さまなどが本尊として祀られている。すると、至尊が多種多様に存在するという矛盾がおきてくる。

聖人はこの矛盾を受け入れることができず、本尊の語を用いられなかったと考えられる。聖人にとって本尊は「阿弥陀如来」一仏であつて、他の諸仏、菩薩等は阿弥陀如来のすばらしさをたたえる方々であつた。

また「本尊」の語は、宗教の本質を表す重要な用語である。浄土真宗のご本尊は阿弥陀如来一仏であるからといって、阿弥陀如来の木像・絵像、南無阿弥陀仏の名号を安置すれば、形式的には正しい本尊といえる。しかし、内面的にどうであろうか。阿弥陀仏の教えが究極として意識されてなければ、その本尊は形式的なものとなる。内面と形式が具わつて本当の本尊は成立するといわねばならない。

実は、内面に何を最も尊重するかによつて、それぞれの宗教が成立すると言ふべきである。仏壇に阿弥陀さまが祀られていても、その人にとってはお金さまが本尊ならば、お金教の信者といふべきであろう。本人に自覚はないだらうけれども。

編集後記

十年前になるが今は亡くなられてたが節談説教師、川岸不退さんの御自坊、能登輪島にある林敬寺で「道標」のインタビューをさせてもらった。節談説教とは節が付いている真宗独特の説教、かつて能登はその本場であつた。

民芸運動提唱者、柳宗悦氏の造語に「土徳」という言葉がある。まさしく師が能登弁で語るお説教、そして厳しくも真宗他力信仰に育まれた能登の風土は「土徳」その土地がもつ品性を十分に裏付けるものであつた。

中川五郎氏が今回取り上げるテーマ「世界とわたし」そして不安。我々を取り巻く「世界」は今、感染症、戦争、異常気象、天災等、予期しない様々な出来事で満ちている。

親鸞聖人の教え、自己「わたし」を見つめるその姿勢は、厳しい環境、流罪となつた越後で育まれ深化されたものと聞く。かつて先人たちは今以上に厳しい条件、逆境の中を生き抜いてこられた。二日の飛行機事故もそうだが災害時における日本人の秩序だつた冷静な対応に外国人はびっくりするそうだ。今も日本人の血の中に「土徳」の力が働いているのかもしれない。そしてそれは我々に今も明日への生きる力、安心感を与えるものに違いない。合掌

表紙の絵 天災の風景

令和6年元日の能登半島大地震。正月の気分は吹っ飛びました。翌日は航空機事故。天災はどうしようもありませんが、人災は防げます。釈尊は「よく注意しながら生きなさい」と申されています。せめて人災のないようにしたいものです。地震などの天災は決して人間の力の及ぶものではありません。かなり遠い砺波の知友の御宮殿(阿弥陀さまを祀る厨子)も崩壊したそうです。能登には知人も多く、いたたまれない思いですが何も出来ません。せめて被災者の心に寄り添う人間でありたい。「我が身に置き換えて」と思つて生きるしありません。災害はいつあるかわかりません。気候が変わり、天変地異の続出です。近いうちに来ると言われている南海トラフの時を考えます。地球熱化により想定外の風、雨、地震、それに伴う火災など異常気象が増え、いくことは間違いないです。生きさせていたたくこと自体が有難いことと思ひ、自分の出来る仕事を怠らさずしていくことしかありません。仏教徒として考える試練を与えられています。

畠中光享 (はたなか こうきょう)

日本画家 / インド美術研究家
真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007

タウンページ <http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)
〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12
(四天王寺西門交差点 西へ30m)